

中央ユーラシアの母神ウマイ

坂井 弘紀

キーワード：ウマイ、テュルク、母神、火の神、山の神

はじめに

ユーラシア各地に広がるテュルク諸民族には、古来、ウマイなる神格に関する伝承が多く広がっている。ウマイは、子供の誕生、成功と豊穣の母なる女神で戦士・兵士・ハン・女性を庇護し、上天神テングリの妻とも捕らえられていた¹。古代テュルクの宗教的概念において、ウマイ女神は重要な位置を占めていた²。ウマイの系統の女神は、テュルク諸民族のみならず、シベリアのウラル系諸民族、中国東北部や極東アムール川流域のトゥングース系諸民族にも認められる³。「ウマイ神は紛れもなくユーラシアの大母神とみられる」⁴のである。

本稿では、主として中央ユーラシアのテュルク諸民族のウマイ母神について、神話・昔話・祈祷文などの民間伝承を中心に、母神・火の神・山の神といった、いくつかの特徴を取りあげながら、論じていきたい。また「鳥」の属性をもつウマイとユーラシアに見られるフマイ鳥との関係と両者の名称の問題についても取り上げることとする。

1 テュルクの神ウマイ

ウマイはユーラシアのテュルク諸民族に伝えられている。これまで確認されているところでは、とくにアルタイやハカス、ショルなど南シベリアに顕著であるが、カザフやクルグズなど中央アジア、チュヴァッシュやタタールなどヴォルガ・ウラル地域、カラチャイ・バルカル、アゼルバイジャンなどカフカース、さらにアナトリアまでの広範な地域に広がっている。ウマイはまさにテュルクを代表する神なのである。なお、ウマイ *Умай, Ымай* には、ウマイ・アナ⁵（カザフ、ウズベク）、ウマイ・ビーチェ（カラチャイ・バルカル）、マイ・エネジ（テレウト・アルタイ）、アマ（チュヴァッシュ）など、いくつかの名称上のヴァリアントがあるが、以下、ウマイと統一表記することとする。

古代テュルク辞書でウマイは「胎盤・子供のいる場所・母の腹、女神の名前」⁶と説明される。11

¹ 松村一男他編『神の文化史事典』白水社、2013年、119-120頁。*Татар мифологиясе энциклопедик сүзлек*, Казан, 2011, 148.

² Skobelev, Sergei G., Eski ve Çağdaş Türklerde Umay Tanrıçası görüntüsünün parçaları ve ikonografisi, *Türkler 3*, Ankara, 2002, 922,

³ 荻原眞子「山の神と産の女神」『東北学』10巻、2004年、88頁。

⁴ 荻原眞子「ユーラシアのウマイ女神」、吉田敦彦、松村一男編著『アジア女神大全』、2011年、576頁。

⁵ アナは母の意味。

⁶ *Древнетюркский словарь*, Ленинград 1969, 611.

世紀のマフムード・カーシュガーリーの編んだ『テュルク語集成』によれば、ウマイは「胎盤」を意味し、「ウマイに祈れば男の子が授かる」と信じられていた⁷。ウマイに母性・女性の属性があることが、これらからまずはつきりと確認できる。

ウマイに関する、もっとも古く、よく知られた叙述は、テュルク（突厥）文字でオルホン碑文（キュルテギン碑文、トニュクク碑文）に記されたものだろう。「ウマイのようなわが母、女神の幸のおかげでわが弟、キュルテギンは勇士の名を得た」（キュルテギン碑文）⁸。ここからは、現在知られている最古のウマイは母神・女神であったことが確認できる。また、「テングリ、ウマイ、イエル・スーが援助してくれることは疑いない」⁹と記されているように、ウマイはテングリと並ぶ神として古くから信仰の対象とされていた。ウマイはテングリの妻であると理解されることもある¹⁰。カザフの伝承には、「天のテングリたちの間には、たいへん慈悲深い女のテングリもいる。女テングリのうち、もっとも卓越した全能の神はウマイ=アナである。古いアルタイの伝説によれば、人間の子供を父テングリのエルグンと母テングリ・ウマイが創った。すべての人々は彼らの子孫であると考えられていた。とくに子孫が増えるときは、ウマイの働きと力が大きい¹¹」とある。ウマイは、古代テュルクの神々のパンテオンでは、最高神テングリに次いで、二番目に位置するものとされる（三番目はイエル・スー（大地と水）、四番目は祖先信仰である）¹²。

ウマイの容姿は、波打った銀色の髪の、美しく、若い女性（テレウト）¹³であったり、白髪の母（カザフ）¹⁴であったりと女性を強く感じさせ、母神・女神としての姿が明瞭である。またカラチャイ・バルカルの英雄叙事詩『ナルト』では、ウマイは「その体は鹿のよう、その駆足は星が流れるよう、その角は月が引っ掛けたよう、その眼は朝の星のよう、三本足の素晴らしいウマイ、三本足の素晴らしい白い雌鹿」¹⁵と鹿の姿で表される。この鹿は「角の母」という名の白い鹿のことで、女性の姿を取り、賢明さや奇跡をもたらす能力を讃えるという¹⁶。古代テュルクのイコノロジーでも、ウマイの頭には三本の角がついたティアラが見られる（図 1）。この三本角のティアラは、カラチャイ・バ

⁷ Қашқары, Махмұт, *Түрк сөздігі I*, Алматы, 1997, 153.

⁸ Talat Tekin, *Orhan yazitlar*, İstanbul, 2003, 46.

⁹ Talat Tekin, *Orhan yazitlar*, İstanbul, 2003, 90.

¹⁰ Кондайбай, Серікбол, *Қазақ мифологиясына кіріспе*, Алматы, 2008, 252-б., *Татар мифологиясе энциклопедик сүзлек*, Казан, 2011, 148.

¹¹ Бабалар сөзі 78:қазақ мифтері, Астана, 2011, 47-49.

¹² Кляшторный С.Г., Мифологические сюжеты в древнетюркских памятниках, *Тюркологический сборник*, Москва, 1977, 124; Стеблева И.В., К реконструкции древнетюркской религиозно-мифологической системы, *Тюркологический сборник 1971*, Москва, 1972, 215.

¹³ Каруновска, *Из алтайских верований и обрядов, связанных с ребенком*,

¹⁴ Жанайдаров О., Ежелгі Қазақстан мифлері, Алматы, 99-100.同書は『古代カザフスタンの神話』というタイトルではあるが、出典が必ずしも明確ではない箇所がある。

¹⁵ «Нарты»:героический эпос балкарцев и карачаевцев, Москва, 1994, 283.

¹⁶ Богашева, А.С., Богиня Умай: эволюция религио-мифологических представлений у карачаево-баркарцев, *Тюрки северного кавказа*, Москва, 2009, 88.

ルカルの叙事詩では白い鹿の三本足へと変化した¹⁷。テュルク神話では、この三本足は非凡さ、神格の特異性を象徴しているとの分析もある¹⁸。



(図1 ウマイ像。頭部に三本角のティアラが見える¹⁹)

2 母神としてのウマイ

ウマイは、乳児を守る精霊（テレウトやカザフ）や母の胸に抱かれた子供や乳児（オグズやショル）とされ、サヤン・アルタイ、北アルタイでは、ウマイは女神の名前としてよく知られている²⁰。ハカスでは、乳児の魂（あるいは生命の力）を意味する²¹。クルグズでは、富や成功をもたらし、家畜を増やしたり、家の炉や子供を護ったりする²²。このようなウマイに共通する女神・母神の特徴は様々な民話・叙事詩などの伝承に明示されており、たとえば、カザフの伝承「アユ・バトルとアイ・スルー」²³では、「ウマイには子供が多かった。彼女は12人の娘を育てた。すべての人間の子供の幸福を増やして、豊かさで満足できるために働く」²⁴と伝えられる。

この伝承では、主人公の女性アイ・スルーがたった一人、石の洞窟で陣痛を耐えながら、大地と天空、ウマイに祈る。すると、ウマイがやってきて、陣痛の痛みを和らげる。その後、アイ・スルーは男の子と女の子の双子を出産する。その際、母神ウマイが再び現れて、二人の子供のへその緒を切り、それをおむつに包んで、アイ・スルーの親戚に見せて、「一族が安泰でありますように」と言って去っていくのだが、この場面には、実際のテュルクの習慣が反映されている。たとえば、19世紀後半

¹⁷ Боташева, 2009, 88.

¹⁸ Боташева, 2009, 89..獣の三本足のモティーフは、カザフの「アクサク・クラン（びっこ馬）」のように特別な動物に関する伝承にしばしば見られる。

¹⁹ Celal, Beydili, *Türk mitolojisi ansiklopedik sözdik*, Ankara, 2005, 583.; Skobelev, Sergei G., 2002, 922,

²⁰ Татар мифологиясе энциклопедик сүзлек, Казан, 2011, 148.

²¹ Бутанаев В.Я., Культ богини Умай у хакасов, Этнография народов Сибири. Новосибирск, 1984, 93.

²² Татар мифологиясе энциклопедик сүзлек, Казан, 2011, 148.

²³ 本稿末にこの物語のテキストを付した。

²⁴ Бағалар сөзі 78:қазақ мифтері, Астана, 2011, 47-49.

に西シベリアのタラ・タタールでは、子供のへその緒をぼろきれに包んで、家の屋根の梁と屋根の板との間に保存していた²⁵。ウマイがへその緒を切り、「おむつ」に包んだことはまさにこの習慣に基づくものであろう。さらに西シベリア、テュメニのトボル、ヤルコフ、ヤルトロフ地区の村々では、ウマイは「子供のへその緒」と同一視され²⁶、先に見た「胎盤・子供のいる場所・母の腹」などと並び、母性の象徴としての「へその緒」とウマイが重ねられている。ウマイの「一族が安泰でありますように」という言葉には、子孫繁栄を叶えるウマイの役割がはっきりと表されている。

アイ・スルーはその後どんどん双子を生み、彼らの子孫はひとつの部族を成したと述べて、物語は終わる。この「双子」にはどのような意味があるのだろうか。ウマイには母の腹や胎盤の意味もあることは上述したが、カザフの迷信では、胎盤は「新生児の双子」と信じられていた²⁷。ウマイの庇護により、双子をどんどん生んだというのは、新生児の双子と信じられた胎盤、すなわちウマイを暗示しているものとは考えられないだろうか。その後も代々ウマイによって庇護されたということを意味するものと考えられるのである。なお、カザフ語で胎盤は жолдас というが、この言葉は本来「道連れ・同行者」を意味する。新生児の双子の「相方」というわけである。

ウマイへの祈祷文では、次のように子供を慈しみ、邪悪なものから守るように祈られる。

ウマイ・エネ²⁸よ、波打つ髪を垂れ下げて、
空から金の弓をひっかけて、
新たに生まれる乳児を驚かさないでください。
ウマイ・エネよ、あなたの胸に抱いて、お慈しみください。
ジンや悪魔を近づけないでください。
不幸や災いを追い払ってください。
子供たちを災害や騒動からお守りください。
母の胸から白い乳を飲ませてやってください。
善行とともに慈しみ育ててください。
命を与えて、太陽の日蔭となってください！²⁹

次にウマイの多産・豊穣の神としての側面について見てみよう。「豊作や家畜の多産のときには、ウマイ・エネの胸から乳が流れる」³⁰という言葉にははっきりと認められるように、ウマイは豊穣・多産の神でもある。また、次の言葉のように、大地の神・地母神としての性格を見ることも可能である。

青い大麦の畑をいつもお守りください。

²⁵ Татар мифологиясе энциклопедик сүзлек, Казан, 2011, 148.

²⁶ Татар мифологиясе энциклопедик сүзлек, 148.

²⁷ Кондыбай, Серікбол, Полное собрание сочинений 5, Алматы, 2008, 257.

²⁸ エネは「母」の意味。

²⁹ Жанайдаров О., Ежелгі Қазақстан мифлері, Алматы, 99-100.

³⁰ Абрамзон С.М., Кыргызы, Фрунзе, 1990, 294

高い杜松の木の根をしっかりと張ってください。

母なる神よ、私の希望をつなげてください。

偉大な草原の母たちをお守りください！³¹

狩獵・遊牧に携わる人々が住んでいたこの地域に、農耕を司る地母神としてのウマイ信仰もあったことがわかる。

イスラーム化が進んだ、中央アジアの人々の間では、ウマイの姿はイスラーム的に変容した。たとえば、クルグズ人はイスラーム受容後、ウマイと預言者ムハンマドの娘ファーティマを同一視し³²、「かつて女性たちはウマイ・エネ（ウマイ母）の信仰者であった。ウマイ・エネ、（つまり）バトマ・スーラは女性たちの母」となったのである³³。バトマ・スーラ、すなわちファーティマ・ズフラはムハンマドの娘であり、ムスリムの間では理想的・伝説的な女性と考えられている。カザフの祈祷・祝祷における、ファーティマの姿もウマイの姿にまさに重なる。

天幕を建てて、火を焚いて、

家族が建てたあなたの家を！

増やし続けさせよ、

幸運と豊かさ、あなたの介護を！

元気づけよ、支えよ、

あなたの庇護者を、ビーフアティマよ！

家畜にあなたの草地を満たさせよ³⁴

この祈祷文は、ファーティマが家族や火、幸運、繁栄という属性をもつことを如実に表している。

ウズベクでは、産婆が新生児のへその緒を取るときに、「私の手ではないよ。ビビ・パエティマの、ビビ・ズフラの手³⁵だよ。ウマイ・アナの、カンバル・アナの手だよ³⁶」と唱える。ビビ・パエティマとはファーティマ、ビビ・ズフラはズフラーのこと、先に見たムハンマドの娘の名である。カンバルは、おそらく馬の守護神カンバル（カンバル・アタ）と混同した誤記であり、ウズベク人が女性の庇護者、産婆の保護者として崇拜する聖なるアンバル・アナのことであろう³⁷。起源的関係においては、古代テュルクやアルタイ、クルグズのウマイとウズベクのアンバル・アナ、サハのアイストの3つは同様な特徴をもち、豊穣の神として起源的に関連があるという指摘もある³⁸。サマルカンドで

³¹ Жанайдаров О., Ежелгі Қазақстан мифлері, Алматы, 99-100.

³² Татар мифологиясе энциклопедик сүзлек, Казан, 2011, 148.

³³ Абрамзон С.М., Кыргызы, Фрунзе, 1990, 293.

³⁴ Бабалар сөзі 93:Магиялық фольклор, Астана, 2013, 306.

³⁵ 「ファーティマの手」はまた、トルコのナザール・ポンジューのような、邪視にたいする護符としてもよく知られる。

³⁶ Абрамзон С.М., Кыргызы, Фрунзе, 1990, 294.; Снесарев Г.П., Басилов В.Н., Домусульманские верования и обряды в Средней Азии, Москва, 1975, 27.

³⁷ Снесарев Г.П., Басилов В.Н., 1975, 27.

³⁸ Абрамзон С.М., Кыргызы, Фрунзе, 1990, 295-296.

は、アンバル・アナは有名なクッサム・イブン・アッバスと関連付けられることもあり、アンバルの名は「皇帝のおば амбайи·шох」が変化したものと説明される³⁹。また、アンバル・アナの聖廟もサマルカンドには存在する。アンバル・アナは、アヴェスターに見られるアナヒター女神によるものとする見解もある⁴⁰。

ホラズム地方のウズベクにはまた、邪悪なアルバストゥと善なるサル・アナという二つの女性の超然存在が闘争するという信仰もあり、サル・アナ（黄色い母）は、長く黄色い髪を振り乱し、それで覆いながら分娩する産婦を助けるという⁴¹。このサル・アナはイスラーム化以前に広がっていたウマイの姿の変形であるとの指摘がある⁴²。ホラズムのウズベクにおいてウマイは、イスラーム化後、ビビ・ファーティマやサル・アナと姿を変えて、信仰されてきたのである。なお、キリスト教の影響下では、聖母マリアがウマイ母神と融合した。カラチャイ・バルカルでは、ウマイ母神は、キリスト教の影響を受け、バイルム・ビーチェ（マリア夫人）となって信仰されるようになった⁴³。イスラームやキリスト教における聖なる女性とのウマイの融合は、信仰・宗教の習合の典型である。

イスラーム化とともに、ファーティマと融合したウマイであるが、トルコでは、ウマイ女神の姿は、オマジュという名の、子供たちを怖がらせるための存在へと変容した⁴⁴。ウマイ・エジェから変化したと考えられるオマジュは、子供を庇護するファーティマとは正反対の役割を果たすようになったのである。善良なる性格が邪悪なものになるという、正反対な性格への変容は、はじめは神格をもっていたもの、のちに悪魔となったデヴ⁴⁵の例などに顕著だが、子供に害を与えるカラ・ウマイというウマイの一種もオマジュやデヴと同様な変容によるものなのであろう。悪事を働くアルバストゥやジャルマウズ・ケンピル、ムスタン・ケンピルなど、中央ユーラシアで伝承される女性や老婆の悪霊は、「邪悪な低級の精霊の一つに引き下げられた」⁴⁶結果によるとの指摘があり、本来は母性的な神格をもっていたと考えられる。つまりアルバストゥやジャルマウズなど女性の悪霊は、母神ウマイが姿を変えたカラ・ウマイと同列に見ることができるのでないか。イスラームを含む、外部からの様々な宗教が入り込むことで、その性格も大きく変化してしまったと推測されるのである。

ところで、アルタイの神話には、最高神ウルゲンの二人の息子、ヤユクとマイテレが登場する。二人は人間の庇護者・保護者とされ、天の第3層に住むという。この層には、すべての命の源とされるストゥ・アク・コル（乳白の湖）があり、その近くには、7人のクダイ⁴⁷が、彼らの家来である、人

³⁹ Снесарев Г.П., Басилов, 1975, 27.

⁴⁰ Celal, Beydili, *Türk mitolojisi ansiklopedik sözdik*, Ankara, 2005, 59.

⁴¹ Потапов Л.П., Умай-Божество древних тюрков в свете этнографических данных, *Тюркологический сборник*, Москва, 1973, 278.

⁴² Там, 278-279.

⁴³ Богашева, 2009, 83.

⁴⁴ Celal, Beydili, *Türk mitolojisi ansiklopedik sözdik*, Ankara, 2005, 444.

⁴⁵ 松村一男他編『神の文化史事典』白水社、2013年、335-336頁。

⁴⁶ Кондыбай, Серікбол, *Полное собрание сочинений 5*, Алматы, 2008, 68.

⁴⁷ クダイはペルシア語起源で「神」を意味する。

間の天使・庇護者・道連れのヤユチ⁴⁸とともに暮らしているスロ山があると伝えられる⁴⁹。このヤユチの像は、ウマイの特徴と重なり合う。また次のようにも伝わる。

「人間が生まれるときに、バイ・ウルゲンはなによりもまず、自分の息子ヤユクに命令を下す。父の命令を実行しながら、先祖の要望により、ストゥ・アク・コル（乳白の湖）から命の力を手にしたヤユチにその誕生を伝え、新たにこの世界に生まれさせ、この世でのその生涯を保護し、その子を助けるのである。」⁵⁰

ここでもヤユチは人間の誕生と保護というウマイ同様の役割を果たしている。ヤユクは最高神である父の命令をヤユチに伝え、人間を誕生させる。

またヤユチについては、「第5層にいるわが母ヤユチよ、汚れを清める乳のようないい湖よ、へその緒を切った白い木片よ、わがハン、ヤユチに祈り、また祈る」⁵¹というシャマンの祈祷文にも言及される。シャマンはヤユチに向かって、声を変えて、この句を温順に繰り返しながら懇願する⁵²。第5層と第3層という違いはあるものの、「乳白の湖」やへその緒に象徴される母性など、ここでも母神の性格が表れている。祈祷文では、ウマイの居場所は「乳の湖」や「乳白の湖」、スメル山、スルン山、スル山と呼ばれ⁵³、「乳の湖」でウマイは、渴きを癒し、身を清め、スルン山で食事を取り、遊ぶ⁵⁴。「乳の湖」は、命の力を与え、汚れを清める場所であり、ウマイの住処でもある。そこは、天上の楽園であり、「子どもの魂がまさに天上の楽園から地上に降りると信じられている」⁵⁵のである。

さて、このヤユチに命令を下す、最高神ウルゲンの息子ヤユクには、マイ・エネという別名がある⁵⁶。このマイ・エネは、ウマイに由来するものと考えられる。もっとも、ヤユクはウルゲンの息子であり、母神ではない点やヤユクよりもむしろヤユチこそウマイの特徴を示しているという点などを考慮すると、ヤユクとマイ・エネを同一視するのは正しくないかもしれない⁵⁷。

マイ・エネについては次のような記録がある。「この名は善なる神格で、子供の庇護者である。テレウトは、マイ・エネの姿を、波打った銀色の髪の、美しく、若い女性であるとしている。マイ・エ

⁴⁸ 創造主の意味。

⁴⁹ Radlov, *Из Сибирии*, Москва, 1989, 359.; ウノ・ハルヴァ『シャマニズム 1』、179 頁。

⁵⁰ Radlov, 1989, 363.; ウノ・ハルヴァ『シャマニズム 1』、179 頁。

⁵¹ Вербицкий В.И., *Алтайские инородцы. Сборник этнографических статей и исследований*, Москва, 1893, С.70.; ウノ・ハルヴァ『シャマニズム 1』、178-179 頁。

⁵² Вербицкий В.И., 1893, С.70.

⁵³ スメル山、スルン山、スル山は、モンゴル系の神話にも登場する、インドの中心の山、スメル山（須弥山）に比定される。ウノ・ハルヴァ『シャマニズム 1』、63 頁。

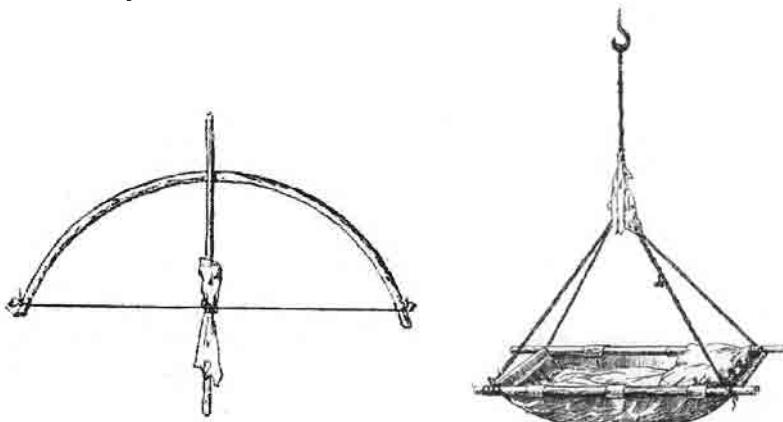
⁵⁴ Дыренкова Н., Умай в культе турецких племен, *Культура и письменность Востока 3*, Баку, 1928, 136.

⁵⁵ ウノ・ハルヴァ『シャマニズム 1』、179 頁。

⁵⁶ Radlov, *Из Сибирии*, Москва, 1989, 359.

⁵⁷ ハルヴァは、ヤユクがマイ・エネと同一であるのは間違いだとしている。ウノ・ハルヴァ『シャマニズム 1』、181 頁。

ネは非常に美しいスルン山に遊び場をもっており、そこで精霊たちは憩い、また食べ物を食べ、人間と接したあとは白乳の湖で身を清める。子供を包む保護膜が新生児を母の胎内で守るように、「マイ・エネ」というぼろ布は出産後の子供を邪悪な靈から守る。危機に陥ると、マイ・エネは目には見えずに、子供の健康や生命を奪おうとする、よからぬ靈に矢を射る（図2）。無事に成長した子供から、ぼろ布「マイ・エネ」は次の子供へと譲られる。それは決して洗われることはないため、時々振りかごの上で汚れた雑巾のように見える（図3）。もしも子供が死んだら、ぼろ布「マイ・エネ」は燃やされ、次の子供には新しいものが吊るされる」⁵⁸。先に見た「乳白の湖」や天の第3層にあるスロ山と同一と思われるスルン山が登場するが、ここでもやはり庇護神としての姿が見て取れる。加えて、そのシンボルとして、この庇護神の名がつけられたぼろ布が矢や振りかごにつけられ、子供の安全と健康が願われる所以である。



(左: 図2 白いぼろ布「マイ・エネ」が付けられた矢⁵⁹)

(右: 図3 「マイ・エネ」と二つのビーズが幼女のゆりかごに吊るされている⁶⁰)

3 火の神としてのウマイ

「シベリアの諸民族文化のなかでは一般に子どもの守護神である女神は同時に火の神、家や家族の守護神として大きな位置づけをもっている」⁶¹と指摘されるように、ウマイは火の神としての性格ももつ。

カザフの「アユ・バトゥルとアイ・スルー」には、凍える主人公を救うために、火を起こすための火打石をウマイとフマイという鳥がもたらす様子が描かれる。

「空を飛ぶ二羽の鳥、ウマイとクマイ（フマイ）はゆっくり低空飛行をし、洞窟の入り口にいるア

⁵⁸ Каруновска, Из алтайских верований и обрядов, связанных с ребенком, Сборник Музея Антропологии и Этнографии 6, Ленинград, 1927, 27.

⁵⁹ Каруновска, 1927, 27.

⁶⁰ Там же.

⁶¹ 萩原眞子「ユーラシアのウマイ女神」、584頁。

ユ・バトゥルの頭をかすめ飛び、二つの石を落としていった。それは白と赤の石であった。これに驚いたアユ・バトゥルはその石を手に取り、それぞれを打ちつけた。それは火打石で、打ち付けると光を発し、飛んだ火花が洞窟にあった乾草や腐りかけたものに付き、燃え広がった」⁶²。

ウマイが火をもたらしたとするこの伝承からも、ウマイの火の神としての特徴をはつきりと見てとることができる。アルタイには、最高神ウルゲンが手に白と黒の二つの石をもって、乾いた草を取り、手のひらで揉み、草に石の一つを置いて、もう一つの石を打ちつけると、そこから火花が散って、草に火が付いたという火の起源神話がある⁶³。人間はこうして火の起こし方を知るようになったというのだが、上記の伝承と類似することは明瞭である。また、トゥングースでは雷の鳥が最初の火を天から地上へもたらしたと伝わっている。ブリヤートやサハには、火が天から降ってくる、あるいは石によって火花が起きるという伝説があるが⁶⁴、カザフの「アユ・バトゥルとアイ・スルー」は、火が天空から降ったものと石から出た火花から起きたという二つの「火の起源」を示す神話として特筆すべきである。そして、ウマイが火をもたらす「火の神」であることも確認できるのである。

また、ウマイはオト・アナ（火の母）の異名をもつ。「アユ・バトゥルとアイ・スルー」でも「火の母ウマイ」と呼ばれている。また、ウマイへの祈祷文には、次の語句がある。

「30の頭のオト・アナ（火の母）は、英雄たちの母。40の頭のクズ・アナ（乙女の母）は、クドウル⁶⁵たちの母。あなたの炎は生ものの、すべてのものを料理する。あなたの息は凍えるものを、慈しみながら暖める。天から降りて、火と炉の庇護者となってください。賢く、我慢強い心の母となつてください」⁶⁶。

火と炉の庇護者である、この母神は炎により調理し、暖を取らせることで人々を守り、「心の母」となるよう祈られるのである。

同様に、アバカン左岸カムシュトウ川河口アルコフ・ウルスで採録されたシャマンの火の精にたいする呼びかけでは、ウマイの名を挙げながら次のように語る。

「わが母、ウマイよ、私はあなたに食べ物を与えます。一椀食べてください。あなたは私たちを夜には心配し、昼には見守ります！聖なる月の名を呼びながら、あなたに白い牛の白いミルクを与えます。あなたの手は、若い乙女のように清い！聖なる日にはあなたを礼賛いたします！まるで母のようなあなたよ、あなたの右手で（子供と）遊び、右の胸で（子供に）乳を与えてください。揺りかごのひもはきつくなり、兄と弟を増やす！そして、揺りかごのひもは固くなり、姉と妹を増やす！」⁶⁷。

⁶² Бабалар сөзі 78:қазақ мифтері, Астана, 2011, 47-48.

⁶³ Вербицкий В.И., 1893, 97.

⁶⁴ 『シャマニズム 1』、234-236 頁。

⁶⁵ クドウル（ヒズル）は、中央アジア・西アジアに伝わる伝説的な聖者で、貧者や困った人々に幸や富を与えるとされる。

⁶⁶ Жанайдаров О., Ежелгі Қазақстан мифлері, Алматы, 99-100.

⁶⁷ Образцы народной литературы тюркских племен 9, СПб, 1907, 564.

シャマンはこの祈祷で、火の精にたいして明確にウマイの名を呼んでいる。豊穣や子宝を祈願する母神ウマイには、火の神としての性格も色濃く見られるのである。

4 地母神・山の神としてのウマイ

ウマイは、上天神テングリに対応する存在として、その妻であり、地母神でもある。母神としての特徴は先に見てきたとおりであるが、大地の神としての性格について見ていく。

地母神や山の神としてのウマイの姿もカザフの「アユ・バトゥルとアイ・スルー」に明確に描かれる。この伝承の舞台はアルタイの山麓である。アルタイの人々はアルタイ山脈を信仰の対象として崇拜してきた。アルタイ周辺に暮らす諸民族に伝わる「アルタイ讃歌」はその信仰をはっきりと表す好例であろう。

「アユ・バトゥルとアイ・スルー」の主人公アユ・バトゥル（「熊の勇士」という意味）の住む国は、そのアルタイの麓の深い森に覆われており、人々は狩をしながら日々を過ごしていた。狩人の求める獲物はアルタイの山々の主の所有であり、「その山はまたウマイ女神としても信仰され」⁶⁸ていた。この伝承では、ある年の冬に大雪が降り、ただ一人、熊の毛皮を身にまとめて狩に出たアユ・バトゥルのみが深い石の洞窟に隠れて、無事であったという⁶⁹。洞窟に逃れた主人公のみがどうにか生き残ったのである。ウマイ女神信仰の原初的な形態が山岳信仰であり、洞窟のある山岳が「女神」であり、「女体」であるならば⁷⁰、「アユ・バトゥルとアイ・スルー」の舞台が洞窟であることは、この話自体がウマイの信仰概念をそのまま反映しているように感じられる。まさに、「大地は狩りの獲物を産み出す母であり、母体である。洞窟すなわち大地の胎内の野獸はやがて地上に生まれることになる」⁷¹のである。内モンゴル東部には、「母の子宮潜り」なる洞窟信仰があり、人々は子宝や夫婦円満、病気治癒、合格などを祈願して洞窟を潜りぬけるという⁷²。雪原に倒れていたアイ・スルーは、洞窟の中で、ウマイのおかげで死なずに、回復する。またこの洞窟の中で、アユ・バトゥルとの子を産む。この伝承は、このような洞窟信仰に基づいているものと考えてよいだろう。なお、内モンゴル東部では、「オメ」は「女陰」を意味するという⁷³。これは、ウマイとの深い関連を想起させる。

ところで、モンゴルではエテュゲンやイテュゲンなどといわれる土地の女神が信仰されていた⁷⁴。この名は、古代テュルク（突厥）の聖山ウテュケン山をただちに連想させるが、同時に注意を引くの

⁶⁸ 萩原眞子「ユーラシアのウマイ女神」、577頁。

⁶⁹ 『ウラル・バトゥル』の冒頭部分のように、原初の人間を連想させる。

⁷⁰ 萩原眞子「ユーラシアのウマイ女神」586頁。

⁷¹ 同上、574頁。

⁷² 同上、583頁。

⁷³ 同上。

⁷⁴ パンザロフ著、白鳥庫吉訳「黒教或ひは蒙古人に於けるシャマン教」『シャーマニズムの研究』、新時代社、1971年、21頁。プラノ・カルピニはイトガの名で記している。カルピニ著、護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社、1979年、15頁。

は、エテュゲンは収穫や家畜、子供の神としてウマイと一致するということである⁷⁵。古代のテュルクでは、ウトゥケン山はもっとも聖なる靈峰として、篤く信仰されていた。ウテュケンという言葉の解釈については諸説あるが⁷⁶、ここからもやはり女神と山の神の重なりを見ることがあるのである。なお、このモンゴルの豊穰女神エテュゲンは中央ユーラシア以東に広がる女シャマンと深いつながりがあると考えられる。たとえば、女シャマンをサハではウダガン、エヴェンキではイダーカン、ウドウガン、ウダガン、ネギダル語ではオドガン、エヴェン語ではウドゥカンなどといい、女神エテュゲンとの関係を容易に想像させる。これらエテュゲン系の女シャマンは、日本の巫女イタコやイチイ、ユタなどともつながる可能性も指摘されている⁷⁷。

「アユ・バトゥルとアイ・スルー」の主人公である狩人が熊の毛皮を身にまとい、アユ・バトゥル（熊の勇士）という名であることが、狩猟生活を映し出すものであることは言うまでもない。ユーラシアの各地で、熊の毛皮や爪、牙などが狩猟民のお守りとして用いられたことはよく知られているが、たとえば、子供のいる家では熊の毛皮が吊るされていた⁷⁸。アユ・バトゥルの熊の毛皮もこうした護身の役割を果たしている。彼は、熊の毛皮と「母なる」洞窟おかげで生きながらえたのであった。

また、ウマイは大地と水を増やす地母神としての役割も果たしている。たとえば、「川をあふれさせ、沙漠に水を通し、山の頂の泉の源泉を開き、水を増やすために疲れることなく働く」⁷⁹。あるいは、「ウマイの能力は、人間の子供に肥沃な大地と澄んだ水を与えることである。このふたつは、生きていくための源である。それゆえウマイは、地上のすべての食料のテングリとも考えられる。彼女は人間の子供にみな同じように慈悲を与える」⁸⁰と伝えられる。豊かな大地と清らかな水を与えることもウマイの重要な役割であるが、この姿は、イランの水の女神としてしられるアナーヒターの姿とも重なり合う。

5 母神ウマイとフマイ鳥

西アジア・中央アジアには、伝説上の幸運の鳥フマイ⁸¹が伝えられている。フマイには、フェニックス、ハゲタカ・ハゲワシ、固有名詞フマーとの3つの意味があり⁸²、フマーは「神話的鳥、最高の

⁷⁵ Lot-Falck, Eveline, *A propos d'Ätügän, déesse mongole de la terre, Revue de l'histoire des religions, tome 149-2, 1956.*; Потапов А.П., *Алтайский шаманизм*, Ленинград, 1991, 292.

⁷⁶ 山田信夫「テュルクの聖地ウテュケン山」『北アジア遊牧民族史研究』東京大学出版会、1989年、70頁。

⁷⁷ ユハ・ヤンフネン著、河村俊明訳「シベリアのシャマニズムについて」荻原眞子編『ユーラシアにおける精神文化の研究』、千葉大学大学院人文社会学研究科、2007年、84頁。カルピニの残した「イトガ」にも注意。

⁷⁸ ウノ・ハルヴァ『シャマニズム 2』、96頁。

⁷⁹ *Бабалар сөзі 78:қазақ миғтері*, Астана, 2011, 47-49.

⁸⁰ Сонда да。

⁸¹ フマイは、フマーhumā、ヒュマhūmaとも言われるが、本稿ではフマイに統一する。

⁸² Сафина Э., *Названия птиц в Татарском языке и их лексикографирование*, Казань, 2006, С.52.

種類の鷲、不死鳥、天国の鳥で、決して地上に降り立つことなく、絶えず上高く飛翔している。もしも誰かの頭がその影の下に入ったら、皇帝になり、幸福になると言われる」⁸³。アゼルバイジャンでも「われわれのフォークロアにおいて有名な鳥の一つが、王権もしくは皇帝の鳥フマイである」⁸⁴と伝わる。バシュコルトでは英雄叙事詩『ウラル・バトル』のフマイがよく知られているが⁸⁵、次のような伝承もある。「フマイはよく知られた鳥である。カラス大の大きさで翼の先は黒く、頭は緑色である。生息するのは空中である。卵を空中に産み、雛は空中に産まれる。フマイは時々地上 40 アルシン⁸⁶ほどまで近づき、戻っていく。その時、この鳥の影が誰かに落ちれば、その者はこの世で皇帝になる、つまり金持ちになる」⁸⁷。また、「人の頭の影にフマイ鳥が降り立ったり、この鳥がとまつたりしたら、その人は幸福になると言われていた」⁸⁸。このようなフマイの姿は、カザフの伝承における「財産の鳥」の姿に相当する。クルグズやカザフに伝わる『エル・トストウク』などに登場する、世界樹の枝で雛をかえすアルプ・カラクスやシムルグもこの鳥の一種と考えられるだろう⁸⁹。また、ウズベキスタン共和国の国章は、フマイをデザインしたものであり、まさに国家の象徴となっているのである。

「テュルク諸民族において女性の庇護者はウマイとフマイ鳥である」⁹⁰というように、ウマイとフマイとの関係は密接であり、このことはウマイとフマイ（クマイ）が並んで登場する「アユ・バトルとアイ・スルー」を見ても、明らかである。叙事詩『ウラル・バトル』では、天空に住む鳥フマイが主人公のウラルと夫婦になり、人々を見守る母神的な性格を示している。フマイは、ウマイの母性と庇護者、子孫繁栄の象徴としての側面をもち、やはり両者の深いつながりが明瞭となっている。中央ユーラシアのテュルク諸民族において、ウマイとフマイが切り離せない関係にあることをまず、確認しておきたい。

先行研究でも、ウマイ神はフマイ鳥と関係があるとされる⁹¹。「ウマイ神を説明する多くの研究者は、ウマイをイランの「フマー」と関係があったとする見解は正しいものである」⁹²、「フマイは、古のテュルク諸民族の神話において、ウマイという名で広がった善なる神、女性の神の像である」⁹³、あるいは「ウマイ・アナは、フマイ／ヒュマ鳥が反映されて同一視されたのである。シベリアや中央

⁸³ Будаков Л.З., Сравнительный словарь турецко-татарских наречий 2т., СПб., 1871, 315.

⁸⁴ Əlizadə, Rövşən, *Azərbaycan folklorunda təbiət kultları*, Bakı, 2008, 126-127.

⁸⁵ 坂井弘紀訳『ウラル・バトル』平凡社東洋文庫、2011年。

⁸⁶ 1 アルシンは、およそ 70 センチメートル。

⁸⁷ İnan, *Şamanizm*. Ankara, 1986, 37.

⁸⁸ Татар мифологиясе энциклопедик сүзлек, Казан, 2011, 148.

⁸⁹ 聖鳥アルプ・カラクスについては、坂井弘紀「カザフの神話的昔話『エル・トスティク』』『千葉大学ユーラシア言語文化論集』14、2012年、233-2262頁；坂井弘紀「地下世界で戦う勇士」篠田知和喜編『異常と常世』楽那書院、2013年、407-430頁を参照。

⁹⁰ Ögel, *Türk mitolojisi* 2, 547.

⁹¹ Татар мифологиясе энциклопедик сүзлек, Казан, 2011, 148.

⁹² Celal, Beydili, *Türk mitolojisi ansiklopedik sözdik*, Ankara, 2005, 249.

⁹³ Сәгитов М.М., *Башкорт халық эпосының мифологик һәм тарихи нигеззәре*, Өфө, 2009, 47.

アジアのテュルク諸民族の民族誌が示すように、ウマイは鳥の姿、あるいは羽の生えた女性として理解されている」⁹⁴といった数々の指摘がある。そして、ウマイは天空に巣を作る想像上の鳥であり、ウマイという言葉は、ペルシア語のフマーhumā、すなわち「世界樹に住む鳥」に由来するという⁹⁵。このウマイの語源をイランのフマーとする見解は、はたして妥当であろうか。ウマイがフマーに由来するという考えには異論もある。「ウマイ像は起源的に、その影に人が入ると幸福になるとされるイランの神話鳥フマイに関係すると考える研究者もいる。おそらく、その反対にフマイ鳥の像の起源は、すべての生き物の祖先でこの世界の原初を生み出した、古代テュルクの女神ウマイの像に起因する」⁹⁶とフマイ鳥こそウマイ女神に由来するものであるとの考えもある。フマイ鳥の起源がウマイにあるか否かはともかく、中央ユーラシアからシベリア、中国東北部、ロシア極東部にいたる広範な地域で、ウマイに類似する女神・母神・守護神が存在することから、ウマイという言葉と概念がフマイ鳥からもたらされたとは考えにくい。ペルシア語のフマーの名称と観念がはるかロシア極東部・沿海州にまで伝播したと考えるよりは、むしろ、テュルク・モンゴル・トゥングースに共通する概念が広がっていったと考え方が自然である。「ウマイという名の語源について指摘される仮定の一つは、サンスクリット語やインドに由来するというものである⁹⁷」との考え方もあるが、その具体的な根拠はなく、やはりウマイの語源は、ウメ・オメなどの「子供の靈魂」や「胎盤・母胎・子宮」などを表すテュルク・モンゴル・トゥングース系の言葉にあるだろう（たとえば、「オメ」は、エヴェンキ語では「子宮」、内モンゴル東部では「女陰」、ナーナイ語では「巣・ねぐら・巣穴」、ウデゲでは子供の魂のある「巣」を意味する⁹⁸）。「ウマイ女神がユーラシアの遙遠なる先史時代に遡る」という想定は諸学者に共通している」⁹⁹との指摘の通り、ウマイがユーラシア中央部から東部にかけて広がる、太古からの信仰の反映であると考えて間違いはない。そしてこの信仰の起源は、古代テュルクにまで遡れると考えられるのである¹⁰⁰。

ウマイがフマイと密接につながり、重なり合うことは先に見たとおりだが、この二つの類似する名稱は偶然によるもので、なんらの関係もないであろうか。まず注目したいことは、ウマイ母神にはフマイ鳥とよく似た特徴があつたことである。この互いによく似た特徴が、（おそらくはモンゴル・トゥングース系の「オメ」や「ウメ」の知識を欠いていたことと合わせて）ウマイがイランのフマー

⁹⁴ Əlizadə, Rövşən, *Azərbaycan folklorunda təbiət kultları*, 2008, Bakı, 126-127.

⁹⁵ Абрамзон С.М., *Кыргызы*, Фрунзе, 1990, 295

⁹⁶ Кондыбай, Серікбол, *Полное собрание сочинений 5*, Алматы, 2008, 68. 256.さらに「イランのフォークロアにあるフマウン、古いロシアのフォークロアに見られるガマウン鳥の姿と名称は、テュルクのフマイの姿と名から派生したものであると仮定できる」とする仮説もある。Кондыбай, Серікбол, *Арғықазақ мифологиясы 4*, Алматы, 2008, 166.

⁹⁷ İnan, *Şamanizm*. Ankara, 1986, 37.

⁹⁸ 萩原眞子「ユーラシアのウマイ女神」、579・583 頁。

⁹⁹ 同上、584 頁。

¹⁰⁰ 萩原眞子「鳥と靈魂」『人文学と情報処理』35 卷、勉誠出版、28 頁。

(フマイ鳥) に由来すると考えさせる要因になったものと考えられる。このよく似た特徴とは、なによりもまず「鳥」の特性である。北アルタイ・クマンディンのシャマンは次のようにウマイを呼ぶ。

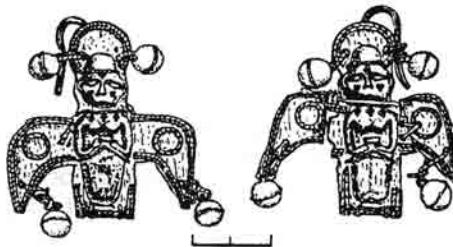
アク・アヤス¹⁰¹ (白い輝き) から、仲間よ、降りよ

ウマイ・エネよ、鳥の母よ

(妊婦の) 下の裾を開けるのだ。

(子供が) 無事に生まれるように。¹⁰²

シャマンはウマイに向かってはつきりと「鳥の母」と呼んでいる。「アユ・バトゥルとアイ・スルー」で天空からフマイと一緒に飛び降りてくるウマイの姿も鳥の姿をしている。ウマイ神の観念はかつて、豊穣・多産を象徴する、あらゆる生き物の創造主、鳥のモチーフである太陽神（たいていは鷲として表される）と関係があったとの指摘もある¹⁰³。沿海州のウデゲの伝承では、大母神は山上の高いところにある樹の巣（オメ）に子供の靈魂をもつていて、生まれた子供の健康や幸福な生活、生育に関心を払い、見守っている。またナーナイでは、巨大な樹（オミア・モアニ）には小さな鳥の姿をした靈魂が果実のようについているとされる。エヴェンキでも、子供の靈魂は小鳥の姿で飛び回っているという¹⁰⁴。ウマイ女神が小鳥の姿で觀念され、生まれくる子供の靈魂で、またそれが憩う鳥の巣であることやウマイの語源「オミ」が小鳥の姿をした靈魂であるとするならば¹⁰⁵、もともとウマイは（マイのものも鳥の属性とは別に）鳥の要素をもっていたと考えるべきであろう。このことは、考古学的資料によっても裏付けられる。1985年、アバカン川右岸のコイバル塚の7番クルガンから、8-9世紀のものと思われる耳飾りが発掘された（図4）。金と銀から作成されたこの耳飾りは、ウマイを描いたものと考えられているが、その形が鳥をモチーフとしていることは明らかである¹⁰⁶。このことから、少なくとも9世紀までに、ウマイは鳥の姿に象徴されていたことがわかる。



（図4 ウマイをモチーフとした耳飾り¹⁰⁷）

¹⁰¹ 最高神ウルゲンの異名。

¹⁰² Погапов, 1973, 276.

¹⁰³ Абрамзон С.М., 1990, 295

¹⁰⁴ 萩原眞子「ユーラシアのウマイ女神」、579-580頁。

¹⁰⁵ 同上、591・583頁。

¹⁰⁶ Скобелев С.Г., *Понятие «Кум» и его принадлежности у тюрков Сибири и Средней Азии*, Этнографическое Обозрение №6, 1997, 85.

¹⁰⁷ Скобелев С.Г., 1997, 85.

本来鳥の特徴をもっていたウマイ母神は、その後、おそらくは中央アジアのテュルク化にともなうイラン文化との接触で、名称もはたらきも類似したフマイ鳥（フマー）と融合、もしくは同一視されるようになったと考えられるのである。ウマイ母神とフマイ鳥は大きな関係と共通性をもつものの、その起源は別々のもので、中央アジアのテュルク諸民族において両者が混同されるようになったのであろう。

おわりに

本稿では、テュルク諸民族に広がるウマイ神に、母神・女神、火の神、山の神、水の神、豊穣神の特徴があることが改めて明らかになった。カザフの「アユ・バトルとアイ・スルー」やシャマンの祈祷文などの伝承には、これらの性格が顕著に見られることができた。また、ウマイは胎児や新生児、子供を庇護し、彼らの健康と成長を叶える存在であることがはっきりした。

ウマイについては、イラン起源のフマイ（フマー）鳥に由来するとの先行研究もあるが、ウマイがもともと「胎盤」の意味をもっていたこと、この類語がイラン系文化との接点がほとんどないモンゴル・トゥングース諸民族にも広がり根付いていることを考えると、母性に関わる言葉として、古くからこれらの人々がもっていた信仰とかかわりがあったと考えるのが妥当である。テュルク化が進んだ中央アジアで、イラン系文化と接触したテュルクからモンゴル・トゥングース系の人々に伝播した可能性も考えられなくはないが、そうするとフマイ（フマー）鳥の最大の特徴である「皇帝・王権の鳥」（その影に入った人が皇帝や富者になるという逸話）の要素が広く伝播していないのはなぜかという疑問が残る。ウマイがフマー鳥になってイラン系文化に入ったという説はさておいて、「鳥」の要素という共通点をもつ、テュルクのウマイとイランのフマイ（フマー）が習合し、独自の姿を形成したことは確かなことのようである。

本稿では、邪悪なアルバストゥやケンビルと共通するカラ・ウマイについて掘り下げることができなかった。ウマイとアルバストゥなど悪鬼との関係についても、大きな関心を引くものの、ほとんど触れることができなかった。また、中央ユーラシアのシャマニズム世界における、ウマイと関係深い女神や巫女（女シャマン）についても論じるべきことは多いが、これらは次の課題としたい。さらに、中央ユーラシアの「鳥」や「世界樹・生命樹」が、ウマイ信仰の背景にあるテングリ信仰やシャマニズム的世界観においてどのような意味があるかを探る必要もあるが、この問題についても稿を改めることとした。

(資料) カザフの伝承「アユ・バトゥルとアイ・スルー」

その昔、アルタイの山麓を根拠地とした人々がいた。彼らは深い藪の森の中で、狩をしながら日々を過ごしていた。ある年の冬に突然、クルク¹⁰⁸の長さほどの大雪が降り、大変な被害をこうむった。ただ一人、熊の毛皮を身にまとめて狩に出たアユ・バトゥルのみが深い石の洞窟に隠れて、無事であった。

雪がやみ、石の洞窟から出てきたアユ・バトゥルは「生きている者はいるだろうか」と荒れた故郷を歩き回っていると、大きな蒼い狼が雪の下から死体を掘り出しているのを見て、「逃げ出さねば」と叫んで駆け出した。すると蒼い狼は死体を投げ捨て、蒼い蜃気楼となって天に飛び去っていった。その白い雪面には月のように美しい娘が横たわっていた。彼女は毛皮に包まれ、雪面に残された「アイ・スルー」（「月の美女」の意味）という名の少女だった。彼女の肺は弱っていたが生きていて、その初乳のような体に狼の歯は及んでいなかった。

喜びが胸からあふれたアユ・バトゥルは「月の平原」で見つけたアイ・スルーを抱き上げ、石の洞窟に連れ帰った。彼女が正気を取り戻し、目を開くまで、ずっと待ち続けた。しかし、彼女は長く眠り続けたまま、微動だにせず横たわっていた。待ちに待つて、痺れを切らせたアユ・バトゥルは洞窟の入り口に出てみた。クルクほどの深さの雪が一面に広がり、完全に物音ひとつしない大地には動くものが何一つなかった。

アユ・バトゥルはこれほどの雪を降らせた天空に向かって嘆いた。そのとき、空を飛ぶ二羽の鳥、ウマイとクマイ（フマイ）を見た。それらはゆっくり低空飛行をし、洞窟の入り口にいるアユ・バトゥルの頭をかすめ飛び、二つの石を落としていった。それは白と赤の石であった。これに驚いたアユ・バトゥルはその石を手に取り、それぞれを打ちつけた。それは火打石で、打ち付けると光を発し、飛んだ火花が洞窟にあった乾草や腐りかけたものに付き、燃え広がった。

そのとき、洞窟に鳥の姿で飛び入ってきたウマイが、白髪の母に姿を変えて、乾草を抱えて、両手で囲み、火を赤々と燃やした。燃える炎に暖まったアイ・スルーはついに目を覚ました。彼女は頭を上げ、身を起こし、死の淵から生還させてくれた炎に、また火の母ウマイに感謝した。これに満足したウマイは火を乾かし、アイ・スルーの顔に置いた。その後、アイ・スルーの手をとり、アユ・バトゥルに授け、「煙が圍炉裏から絶えぬ家庭をつくり、子宝に恵まれますように！火が絶えませぬように！」と祝福の言葉で寿いだ。

森の山に多大な被害を与えた雪は、獣や鳥たちにも被害を与えた。狩に出ることができなくなったアユ・バトゥルとアイ・スルーはお腹を空かせ、死にそうになった。彼らは火を絶やさぬようにした。そうしていると、洞窟の下から声が聞こえてきた。目をやると、洞窟の下にウサギの足跡があるでは

¹⁰⁸ 馬を捕らえる棒。

ないか。洞窟で身を縮めていたウサギが火に焼かれ、そこから逃れて、鳴いていたのであった。それで二人は「地面から7羽のウサギを見つけたぞ」とそれらを捕らえ、喜んでその肉で命をつなぎ、冬を乗り越えることができた。カザフで「大地から7羽のウサギを見つけたように喜ぶ」という言葉はこれに由来する。

こうして冬を過ごし、雪が溶け、森が現れた。アユ・バトゥルは森を歩き回り、岩山を巡り、獣や鳥を狩りした。「熊がいればそれはわが富。洞窟があればそれはわが家」と洞窟に残ったアイ・スルーは火を起こし、水を注ぎ、ベリーを摘み、狩でもたらされた肉を料理した。二人の毎日はこのように過ぎていった。

ある日、アイ・スルーは身ごもったことに気づいた。彼女はこのことをバトゥルには隠していた。手にした獣や鳥の肉や集めたベリーに困ることはなかったが、食べては吐いた。それを悲しいものだと嘆いたアユ・バトゥルは狩を止めた。ついにアイ・スルーは自分の妊娠を伝えた。彼女の望みをかなえるための食事を見つけて持ってくるためにアユ・バトゥルは旅に出た。しかし、高い高い山を越え、狭い道を進んでも、平地に住むという白鳥の卵を見つけて持ってくるのは容易ではなかった。日が日を過ぎ、月が月を過ぎた。アユ・バトゥルはあせった。月日が経ち、アイ・スルーを陣痛が襲った。たった一人、石の洞窟で陣痛を耐えながら、大地と天空に祈った¹⁰⁹。自分を死から救ってくれたウマイに祈った。すると、ウマイがやってきて、彼女を哀れんだ。ウマイはすぐに彼女の痛みをやわらげ、双子が生まれた。男の子と女の子であった。母神ウマイはこの子らのへその緒を切り、おむつに包んで、アイ・スルーの親戚に見せて、「一族が安泰でありますように」と言って去っていった。

ウマイのご加護を受けたアイ・スルーは子供たちを大切に養った。外から「いるかい？問題ないかい？」とアユ・バトゥルが入ってきた。「私のウマイはただ一人、だけど私のクマイ¹¹⁰は二人いるのよ」とアイ・スルーは抱いた二人の子供をアユ・バトゥルに見せた。以後、二人は長生きした。アイ・スルーはどんどん双子を生み、彼らの子孫はひとつの部族を成したという。

(さかい ひろき・和光大学表現学部)

¹⁰⁹ テングリとウマイ。

¹¹⁰ テキストには「グリフィン」の注がある。ウマイ母神とグリフィンとしてのフマイが揃って登場することは、中央アジアにおいて、ウマイとフマイが別の概念と認識されていたこと、ともに酷似する役割を担っていることが、両者の起源が異なることとこれらが習合したこと示しているといえる。

The mother goddess Umay in Central Eurasia

SAKAI Hiroki

Keywords: Umay, Turkic peoples, the mother goddess, the goddess of fire, the goddess of mountains

Summary:

The Goddess Umay, also spelled Imay, May or Ama, is very popular among the Turkic peoples in Central Eurasia. Umay had been believed as the goddess of fertility, happiness, fire and mountains. This goddess was considered as the wife of the highest god Tengri among the Central Eurasian Turkic peoples. In ancient days Tengri was the major belief in Turkic peoples. Umay was the second highest godship after Tengri in those days, or she was believed as the highest deity. She had been worshipped not only by Turkic peoples but also Mongolian and Tungusic peoples. According to this ancient belief, newborn infants and children used to be guarded under the protection of Umay. It had been considered that the origin of the word Umay is Persian. But it is natural that the word Umay is not from the name of a legendary bird Humay/Huma, but from the name of the body of women, placenta. Etymologically speaking, the word Umay comes from Umay, placenta in Turkic languages. After Turkization of Central Asia, the name and belief of Umay amalgamated with the Humay/Huma. Therefore we can see the conception fused of Umay and Humay/Huma in the oral tradition such as myth, heroic epic, folk tale and verse chanted by shamans in a séance.